

明治期合巻『島田一郎一代記』解題と翻刻

A Reprint of "Shimada Ichiro-ichidaiki"

キーワード：明治期合巻・『島田一郎一代記』・翻刻

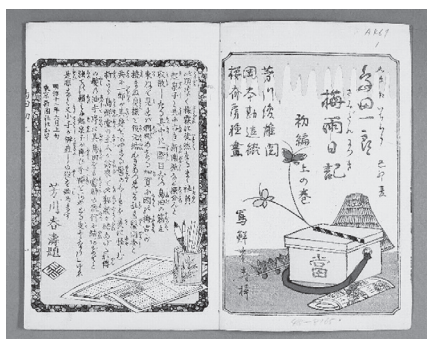
本稿では、明治期合巻『島田一郎一代記』を翻刻紹介する。本作は明治期草双紙『島田一郎梅雨日記』(岡本起泉綴・櫻齋房種画・芳川春涛画、島鮮堂、明治十二年刊)の抄録である。明治期草双紙と明治期合巻については、高木元の先行研究が備わる(注一)。高木が指摘した両者の特徴をまとめると、次のようにまとめられる。

	明治期草双紙	明治期合巻
造本	全丁絵入の木板印刷本で、一編は九丁三冊。	全丁絵入の木板印刷本で、一編は十丁一冊。
内容	新聞の続きものに基づく。	実録などの抄録が多い。
特徴	表紙にボカシや空摺が施され、見返しや序文にも意匠が施され、口絵の彩色も淡彩を重ねた美しい色合いである。愛玩の対象となった。	全体的に安っぽい作りで、絵は雑で大味。文章も短く、文章の周囲の空間も多く、スカスカな印象である。基本的に読み捨て。

愛知淑徳大学論集—文学部篇—第四十九号 二〇二四・三 三三一—三八

萩原大地・石川詩織・野村萌楓
OGIHARA Daichi・ISHIKAWA Shiori・NOMURA Moeka

右表を踏まえた上で、次に掲げる『島田一郎梅雨日記』と『島田一郎一代記』の版面を比較すれば、明治期合巻の粗雑さは一目瞭然である(注二)。

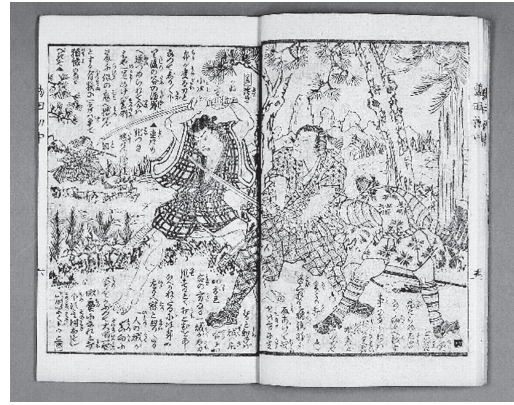


【『梅雨日記』初編見返】



【『一代記』上巻見返】

三三三



【『梅雨日記』初編中ニウ・三オ】



【『一代記』上巻三ウ・四オ】

『島田一郎一代記』の抄録の方法に注目すると、挿絵は『島田一郎梅雨日記』の挿絵の構図を転用したと思われるが、文章は『島田一郎梅雨日記』の文章を大幅に削除したものになっている。その結果、本作の内容は島田一郎の誕生から処刑までに絞られ、彼の生涯を描いた一代記として再編されている。上巻の島田一郎の来歴に対して、下巻の大久保利通暗殺に至るまでの展開が急展開である印象は否めないが、島田一郎の生涯を描くことを意識した抄録が行われていたと言えるだろう。

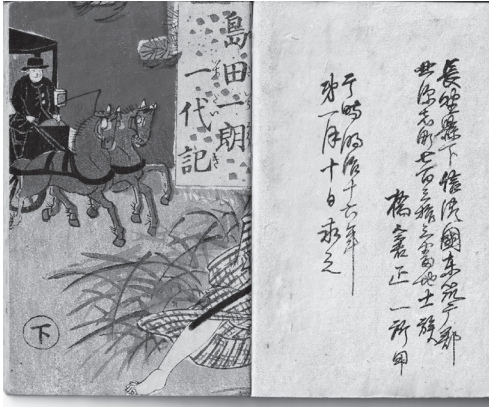
翻刻は愛知淑徳大学文学部国文学科三年生(当時)の石川詩織・野村萌楓が行い、修正と確認を萩原が行った。本稿では可能な限り底本に忠実に翻刻した。送り仮名や濁点など、原文通りの箇所は「ママ」と附した。擦れなどで判読不能な文字は「□」で表記した。なお、判読の便宜のため、適宜句読点を補った。

【底本書誌】

上下二巻(合冊一冊)。縦一七・五糎×横十一・四糎。摺付表紙。「島田一郎一代記 上下」(表紙)、「島田一郎一代記」(下巻表紙)。金松堂辻岡文助刊。上巻裏表紙に「長野県下信濃国東筑摩郡北深志町七百三拾三番地土族／橋倉正一郎甲／于時明治十六年／第一月十日求之」とあり、刊行年は明治十六年以前と思われる。上下巻の表紙を合わせると、島田一郎が大久保利通を狙う構図となる。



【上巻表紙】



【上巻裏表紙・下巻表紙】

頃は嘉永の事とかや。加州金沢藩の足軽にて東都本郷なる上屋敷に在勤せる嶋田重兵衛一子に一郎といふ者あり。生立容貌ことに美しく女子にして見まほしき優かたなるも筋骨はふとく

【つぎへ】(一オ)

して其はじめ乳のふ足なる小児に似ず、その性質いとも活潑にて頗ぶる激しく武藝も他人に勝れ未頼母しき若ものなりと、父も心よるこびける。爰に徳川の將軍、政權を朝廷へ返上ありしより御一新の改革にて、大名を華族なし、府藩縣の制度を設けられ、是までの藩主を藩知事と定められ、東京ある屋敷を取はらひ、家族はそれ／＼國元へ引うつる事になりしは、明治二年の六月にて、一郎が十五歳のときなりき。斯て一郎親子のものは加州へ至りて

【つぎへ】(一ウ・二オ)

二年越し学問にのみ心を入れしが、この程続く五月雨にこゝろ屈して居たりしが、或日久しぶりの快晴を得たり。かしこし一郎は日頃の鬱をはらさんと、獵銃を携さへ城下はなれし山上山のおもとを廻り、其処此処とあさりしが、終に深山にふみ迷ひ、斯てはならじと、元来し道へ引かへせしに、同じ枝折の多きゆゑ、さして行方を定

【つぎへ】(二ウ・三オ)

めんと、枯枝を立て仆れし方へ空頼めなる細道を直走りに急ぎ、やう／＼にして一ト筋、広き路に立ち出、ホツト一ト息つきながら、傍への嶺に腰うち懸、四方の気しきを詠むる折、方角は何処か聊か分らねど、劍の刃おと耳近く響に響き聞ゆるに、是はいぶかしと、巖にのぼり見れば、彼方の谷ごしに二人の賊を相手となし、兼て見知りし同藩にて此木小次郎といふ若者

【次へ】(三ウ・四オ)

〔つゞき〕 なれば助太刀なさんと思へども、谷ごしなれば是非なくも急ぎ片への狼銃を取ると均しく火蓋を切る。ねらひ違はず一賊が肩さきうち貫ぬく弾、アツと一声叫びしま、息は絶たり。不意を打れし一人の賊はこのありさまに恐怖なし、一チ足出して何国ともなく逃行ける。一郎はかつらに取りつき、漸く谷間を越て勞れ仆れし小次郎を抱き起して用意なしたる瓢への水を含みつき、顔へふきかけ「此木君、賊は既に逃去たり。気をたしかにしたまへと呼ぶに、漸く眼をおし開き、一郎の顔を打ながめ」ヲ、

〔つぎへ〕(四ウ・五オ)

〔つゞき〕 郎君にてありける。只今危急を救はれしも貴殿にや。忝けなしと幾度の礼を述べ、今日朝ままだより親友杉本脇田兄弟、杉村等をかたらひ山狩に出しかど、銘々一ツ処にありては得物も少なく興薄ければ、銘々四方へ離散なし正午を合図に麓なる野々崎村へ会せんと約束なして立わかれ、此処へ来か、左右より声をも掛す、ふたりの曲者切懸りしか、某しも少しく用意を致せしゆゑ、二人を相手に戦ひしが

〔つぎへ〕(五ウ・六オ)

〔つゞき〕 おもふに増たる強のものといふ折、丁度杉本等は小次郎のおそきをあんじ、其処此処と尋ぬるをり、此方にあたりて一発の銃音せしを便りにて尋ね来りしとの事ゆゑ、小次郎は喜びびて有し次第を物語り、一郎を同道なし野々崎村の茶店に伴なひ、一郎をもてなして、是より一同ふかく親しみ互みに近しく往来する事とはなりぬ。斯て小次郎は父金十郎に委細を咄し、一郎の立身を乞ひしに、折もよく大改革の機にあたり、是まで卒族の嶋田重兵衛を士族に列せられれば、先祖への面目なりとて、一郎も諸共に喜びあれば、悲しみある浮世のならひ、重兵衛は

〔つぎへ〕(六ウ・七オ)

〔つゞき〕 其月の末つかた、黄泉の客となりしかば、一郎の歎きひと方ならず。然れども、斯てあるべきにあらざれば、野辺の送りも立派に濟せ、忌日くのの仏事とて聊かおこたりなかりけり。偕も一郎は父母ともこの世に在さねば、遠く繁華の東京に志願の学問修行せんと、其事を小次郎にも語るに、小次郎も疾より其志しありとの事にて両人初めて志しを決し、小次郎は父金十郎に許しを受け、心がまへぞなしたりける。爰に小次郎の云号けに綾子

〔次へ〕(七ウ・八オ)

〔つゞき〕 云へるは同藩森茂道のむすめなるが、夫小次郎が東京へ出立と聞て、身もよもあらぬ思ひ、さりとして修行とあるからは止むる事もなげなやと、部屋に籠りて忍びなき、さりとして此木小次郎は綾子がなげき知らぬにあらねど、思ひ立ては大丈夫の、などが女の愛におぼれん、終に明治五年の三月、一郎と諸共に縁者その他へいとまを告げ、故郷をうしろに成じ、日数重ねてやうくと蟹の歩行の横はまへ着しければ、弃天通りの丸岡へ泊りしが、その翌日一郎は起出で、港内を見物せんと促が

〔つぎへ〕(八ウ・九オ)

〔つゞき〕 せしに小次郎は心地わるしと起もやらねば、一郎は心を痛め、宝丹など買ひもとめ、那これ介抱なしたるに昼過るころ、大ひに落つき、食事さへ出来たれば、今は案事におよばず。立出給へと一郎が進めに任せ、近所なりとも見物せんと、夫より一郎はたゞ一人旅宿をたち出で、先づ大波戸場を一見なし、伊勢崎山に

〔下巻へ〕

〔上の巻より〕 のぼり四方を見渡すに、その絶景云はんかたなく思はず時をうつせしがば、いざ戻らんと、元来し道はあきたれば見ぬ処を帰

らんと、山を下つて名も知らぬ淋しき方へ入相の日脚も西へ遠近をさまよふ

つぎへ(一オ)

折しも村雨さへ打降出てそれ等の用意あらざれば、今は途方にくれば、暗き木の間に燈火の光りさすのを便りにて、路をへだてし一ツ家の軒端に立ち寄り案内を乞ふに、内には杖の音たたく、止れるたびに女子のなく声、合てん行かずと一郎は柴折戸をそつと忍び入り、窓の障子の破れ間よりうちの容子を伺ふともしたら髪のお婆が悪さげに「コレお梅、そなたは親御にはやく別れ便りなき身を、慈悲ぶかい私が引とつて五年越世話をなしたる大恩をわすれて異人はいやだなどとかぶりをふるゆゑ此苦しみ。承知をなせば許して遣る、どうだと返事をするかと云ど、女は

次へ(二ウ・二オ)

かぶりを振り赦したまへと泣ばかり果しなれば、老婆はいら立て可愛さ余つて悪さが百ばい、小刀せめにして呉んと立上るを、一郎は見兼てやにはに踊入り、老婆をいたく投付て女の縄を切ほどく折から、もどる主人は驚き仔細を問に、斯々と語りをはつて一郎は深く老婆をいまして暇告て戻りける。偕も一郎小次郎の両人は其翌日、東京通ひの汽船に乗、京に着し、一郎が一方ならぬ縁さへある本郷四丁目の八百屋は没してのち、お辰は同所に宿やを営みせることは兼て噂に聞ば、此方を便りに出京せしゆへ、是を頼みて止宿なし

次へ(三ウ・三オ)

早くも二年の星霜を経たる夏の末、嶋田此木は夕方より宿を立出で涼みがてら、湯嶋天神の境内にいたりしをり、杉村杉本の両士に出合しかば、それより近辺の料理屋へたち入、藝技をよびしに、何

斗らん、横浜にて救ひしお梅にてありしかば、一郎その後来り、終に深き中とぞなりぬ。偕も一郎は開運の時節到来せしにや、高知縣の何某周旋にて或省の出世に補せられしが、日々に昇等したりしが、何か長官と議論合すしてありしが、程なく鹿兒嶋縣へ出張仰せ付けられしかば、幸ひなりと出立をぞなしたりける。去程に一郎は

三ウ・四オ

次へ

いづぞや此木小次郎が鹿兒嶋へ至りしかば、此度対面せんと思ひしに、小次郎は一郎の出張を早くも聞知り、途中まで出迎ひ、夫より御用の際には両士供々西郷の許へ往來するうち、桐野篠原等をはじめ私学校の生徒等とも深く交はりを結びける。然るに、小次郎は何か用事ありとて国元へ出立なし、跡は一郎鹿兒嶋に残りしが、何おもひけん、職を辞し、金沢へこそ急ぎける。斯て嶋田一郎は早くも金沢へ到着なし、直ちに此木方へ

つぎへ(四ウ・五オ)

到りしに、思ひかけざる事なれば、小次郎は驚きて奥まりたる一ト間に伴なひ、此木は嶋田に打ちむかひ突然の帰願をいぶかるにぞ、一郎は声をひそめ、今度僕が辞職なし、俄かに帰りし次第といへるは、君をのけて謀るの人なし。兼て少しの咄しありし。彼の次学校の人々が密議も粗決定せし故と、是より一層声を低うし、何やら互ひに語らひあひしが、跡にて是を思ひ合せば、後に大逆を企つるもとひこそとは知られたり。斯て嶋田此木の両士は、より密談なせしうち、杉本脇田もいつしか同意せしと見へ、都合六人、血をす、り死を供にせんと

つぎへ(五ウ・六オ)

約しけり。去程に小次郎の父金十郎は風邪の心地とうち臥せ

しが、老病の果敢なくも帰らぬ旅路へ趣向れしかば、家内の愁傷大かたならず。然れども、この俣置べきにあらねば、泣く野辺の送りもいとなみ、跡ねんごろに弔らひける。偕も此木小次郎は父の遺言にて長連豪と□名を改ため、日を撰□て、六人は銘々縁者の人々へ夫とはなしに暇を告げ別れをしむ。そが中に小次郎の長連豪が母貞松尼は、いつぞや嶋田一郎と秘かに語るを立聞せしかば、出立の前夜に至り連豪を□ぎへ(六ウ・七オ)

【つぎ】 近く招ぎ「年老たれば、ふた、び又逢見んことのおぼつかなしと、それとは云はぬ暇こひ、堰来る泪のみこみつ、泣がほ見せじと高砂の謡ひも、奥歯もれ来るなみだ、母のおかほの見納めと思へば、我強き大丈(つぎへ)(七ウ・八オ)

【つぎ】 夫もこたへかねたる名残りの涙、思はず翻す一ト雫、二ツト心を取り直し、はや明告ぐる鶏の音に尽きぬ名残りを振り捨て、同意六人東京さして登りしが、容易ならざる大望ゆへうかつに手をば下されずと、その時節をぞ待ち居たる。斯て六人の者どもは今度事をなす趣意書を作り懐中なし、明治十一年五月十四日麴町紀尾井坂に□次へ(八ウ・九オ)

【つぎ】 明治の元勳大久保内務卿を参内の途中、乱刀の下に斃せし後、直ちに宮内省の門衛に自首し、六人速かに罰を受しは兇なりといへ共勇ましけれ。(九ウ)

(注一) 高木元「十九世紀の草双紙—明治期の草双紙をめぐって」(『文学』十卷六号(岩波書店、二〇〇九年十一月)に収録)
(注二) 『島田一郎梅雨日記』の画像は早稲田大学図書館柳田文库本(請求記号・文庫二 A 056)による。『島田一郎一代記』の画像は架蔵本による。

今回、資料の画像掲載をお認めいただいた早稲田大学図書館に記して感謝申し上げます。